

『ウィンダムミア卿夫人の扇』における キリスト教的要素

阿久根 政 子

Lady Windermere's Fan: Christian Factors

AKUNE Masako

Christian principles suggest that people should live with an open mind and heart to help others who may have great evil or risks to evil. In this play, *Lady Windermere's Fan*, the leading protagonist Lady Windermere's adherence to an intolerant puritanical moral cord is the central issue around which the play is organized. As a result, she is incapable of understanding her husband's interest in Mrs. Erlynne's social success. By the end of the play, Lady Windermere argues with her husband, saying she "don't think now that people can be divided into the good and the bad as though they were two separate races or creations". Although this issue is central to the drama, the dramatic actions hinge upon Mrs. Erlynne's saving her daughter from a moral chasm. And the small luxurious fan belonging to Lady Windermere could help bring about eventually a happy ending in this drama.

From a Christian point of view, this study examines the relationship between Lady Windermere and Mrs. Erlynne with the past, with the dilemma of Mrs. Erlynne who plays the parts of the good and the bad, and finally with their psychological descriptions of these characters revealed through the circumstances shown surrounding the fan.

Key words : good and bad, sin and atonement, penitence, maternal affection

キーワード : 善と悪, 罪と償い, 回心, 母性愛

序

1891年の夏, Oscar Wilde はウィンダムミア湖のほとりの別荘へおもむいた。そこは, ワーズワスによって知られる湖水地方の一隅で, とりわけ, 彼はこの湖の名を愛した。彼は創作にわずかの時間を割くのさえ惜しみながら, たちどころに一編の劇を書きあげた。それが, 最初の世話もの Comedy of manners 『ウィンダムミア卿夫人の扇』であった。

この劇はうすっぺらがそのまま人生の厳粛に通じる様な主題, いきいきとした会話, 軽妙な逆説, 鮮烈な箴言, 巧みな場面と配置をそなえ

ており, 英国の劇場で見られた最も機知に富み, 最もよく構成された劇であった。この作品によって, Wilde は英国の劇作家であるコングリーブ, シェリダン, ゴールドスマス達の系統を引く喜劇作家の輝かしい列に加わり, 名誉ある地位を得た。

この劇は Wilde の四つの風俗喜劇の中の一つで, 人間が過去に犯した罪がどのように現在に関わるかという問題とプロットの構成の面で『理想の夫』と共通している。この『ウィンダムミア卿夫人の扇』の劇も, 「過去に犯した罪」ということが中心テーマになっているが, アーリン夫人の犯した罪は, 金銭, 地位, 権力といっ

たような俗物的要素に左右されたものではなく、いわゆる不倫の罪である。この劇の真価について考えると、この作品は興味を起こさせる力強い筋が見事に書かれていて、それが『ウィングミア卿夫人の扇』を成功させ、成果をあげている特質でもありと思われる。

ロンドンの社交界を舞台にした、かなり評判の悪い女性についてのコメディの主人公、アーリン夫人は何度となく犯した姦通の罪の嫌疑があり、とかく噂の多い女性であるが、善良で真面目な実の娘であるウィングミア卿夫人を男の誘惑から救おうとする母性愛がテーマとなっている。一本の華麗な扇を中心に事件が展開するという巧妙な構成からなり、小道具の扇一本が巧みに二人の心理描写の効果をあげている。

本稿において、ウィングミア卿夫人と過去を持った女・アーリン夫人との関係、「善人と悪人」の二役を演じるアーリン夫人のジレンマについて、最後に小道具「扇」に託された両夫人の心理的描写を、キリスト教的観点から考察してみたいと思う。

1. 二人の女性

ーウィングミア卿夫人とアーリン夫人

アーリン夫人が彼女の母親であることは、ウィングミア卿とアーリン夫人との間の秘密であり、ウィングミア卿夫人はアーリン夫人が自分の母親であることを知らされていない。それで、ウィングミア卿夫人は、彼女自身がほんの子供の頃に母親は亡くなったと思い込んでおり、彼女は伯母に育てられ、ピューリタンの厳しさのあることを自覚している。

…わたし、いくらかピューリタンじみたところがございますのよ。そんなふうで育てられたのです。…母はわたしがほんの子供のころ、なくなりました。いつも父方の伯母にあたるジュリア伯母さまと暮らしていましたの。…伯母は厳格でした、でも、世間のひとが忘れかけているもの、正と不正の別を、教えてくれました。伯母という人は妥協というものを許さない人で

した。このわたしだってけっして許しませんわ¹⁾。(p.81)

ウィングミア卿夫人は「世間の人忘れかけているもの、正と不正の別」を伯母から学んだことを感謝しているが、皆からは時代遅れの女と見られている。また、人生というものは投機みたいなものと考えられていたが、これに対して彼女は「人生は秘蹟」、「人生の理想は愛」、「人生を清めるものは犠牲」だと言う。また、ダーリントン卿から「世間のいわゆる過失なるものを犯した女性は、絶対に許されるべきではないか」と問われ、「絶対に許されるべきでない」とピューリタンの厳しさできっぱりと答えるウィングミア卿夫人に対して、彼は「善良な女というのは、なんと厳しいのだろう！」と嘆く。

一方、舞踏会でベリック公爵夫人はアーリン夫人のことを「あのいやな女」「いかがわしい前歴、1ダースも前歴」を持った女であると言う。ウィングミア卿夫人はその人と自分とどんな関係があるのか、また夫がその人とどんな関係があるのかと尋ねる。ベリック公爵夫人から夫が「あの女と親しくなっている」と聞き、結婚してまだ2年、赤ん坊もやっと6ヶ月になったばかりで、夫の不実を信じる事が出来ない。

ウィングミア卿夫人は誠実な若い花嫁であり、夫に対して完全な信頼を持っている。しかし、もしその信頼が裏切られるならば、「目には目を、歯には歯を」的な仕返し原理ののっつて、彼女が行動することは明らかである。彼女の夫がアーリン夫人とあまり親しすぎるということを知られ、夫に対する信頼が裏切られる。いったい、アーリン夫人とは誰なのか。ウィングミア卿夫人の疑惑は、彼女の夫の銀行通帳を見た時に的中した。アーリン夫人が夫の愛人であることが分かり、憤慨と絶望のあまり、愛してもいないダーリントン卿に心が揺れる。しかし彼女の夫ウィングミア卿はアーリン夫人を彼女の舞踏会の客の一人として認めてくれるようにと強要するが、ウィングミア卿夫人は、夫の愛人と思われるその人を自分の舞踏会に招待す

ることは自尊心が許さない。「もし、彼女が来ればこの扇で彼女の顔をたたいてやる」と憤慨し、夫を脅す。

ところで、アーリン夫人は子供を生んで間もなく、別の男との関係により、夫と子供を捨てて、家を飛び出してしまった。そして約20年後、娘の夫ウィングミア卿の前に姿を現し、社交界に復帰したい気持ちを表明する。過去に罪を犯したために、世間から憎悪の目で見られながら、今でも男関係でスキャンダルの絶えない女が真面目で品行方正な娘の前に、母として名乗りを上げて登場すれば、娘は恥ずかしい思いをするはずである。妻に恥をかかせたくないならば、自分を社交界に復帰させなさい、とウィングミア卿を恐喝した。その結果、彼は妻には秘密で、アーリン夫人が社交界に戻れるように努力する。しかし、破廉恥な母親アーリン夫人との誤解により、夫婦の間に亀裂が生じ、言い寄る男の元に走ろうとする娘の危機に直面する。

こうした状況の中で、舞踏会に招待された人々のアーリン夫人に対する批判は痛烈である。「婦人連はあの女のことをひどく悪く知っている」、「さんざんこき下ろしている」、「イギリス市場向けに作りたいかわいしいフランス小説の豪華版みたい」、「あの女についてぞっとするような話を聞いたことがある」等アーリン夫人を手厳しくけなす。また、ウィングミア卿夫人は自分の誕生日にアーリン夫人が招待されたことに憤慨し、「この家は汚された」と嘆く。

しかし舞踏会でアーリン夫人に直接会ってから、女性達の彼女に対する評価に変化が生じ始める。ベリック公爵夫人はアーリン夫人の悪口を言ったことを後悔し、彼女に謝罪をしながら、彼女について次のように言っている。

とても魅力あるかたで、人生のこともよくわかっていらっしやる。二度も結婚するような人間は全然認めないとおっしゃったわ…なぜ世間であの方のことを悪くいうのか考えられないわ。(p.134)

また、舞踏会中プリムディル卿夫人はアーリ

ン夫人のことを悪人ではなく、「美しい人」として羨望の眼で見ている。「アーリン夫人って、なんて魅力のあるかたでしょう。木曜日に昼食に来てくださいますのよ」と、アーリン夫人を昼食に招待する事を誇りに思っている人さえいる。はじめ、婦人達はアーリン夫人を見下し、差別し、偏見によって判断し、批判的で、彼女を「いかがわしい女」として扱っていたが、アーリン夫人の人柄に触れ「善良な女」であることに気づく。

しかし、ウィングミア卿夫人は心の動揺を感じながらも、ダーリントンの家に向かって自分の家を飛び出す。アーリン夫人だけが彼女の逃亡に気づき、彼女を追跡し、救おうと決心する。なぜなのか。それは彼女自身の身にふりかかったその同じ悲劇が再びこのもう一人の婦人の身にふりかかってくる危険を感じたからである。アーリン夫人ははじめ若い妻の立場にあるウィングミア卿夫人にこのようなことをすれば、どん底まで落ちて、世間の人々から軽蔑され、嘲笑され、見捨てられ、冷笑され、世間のつまはじきにされると説得するが、うまくいかず、次に若い母親の立場から彼女を説得し成功したものの、この二人の婦人達は、ダーリントン卿、ウィングミア卿、そして男性の一団体が部屋に入って来る前に、ただ隠れるだけの時間しかなかった。「ここに彼女の扇がある－それは私の妻のものだ」とウィングミア卿は妻の扇を発見する。しかし、その扇を落としたのは私だと言って男性達の前に姿を現したのはアーリン夫人であった。舞踏会の後、ダーリントン卿の部屋での男性達のアーリン夫人に対する評価は、「アーリン夫人、今夜ばかりはりっぱだったじゃないか」「賢い女だ」「とても賢い女さ」「ほかの女たちにたいしてりっぱな模範を示しているわけだ」と言われるほど、男性達からもアーリン夫人は「善良な女」として認められたにもかかわらず、この扇の発覚によって再びアーリン夫人の「善良な女」の名が帳消しになる。

ウィングミア卿ははじめからアーリン夫人を「善良な女」と思っていたが、ダーリントン卿

の部屋にいたことを目撃して、彼女のことを「悪女」だと軽蔑する。しかし、ウィンダミア卿夫人はアーリン夫人の愛によって人間に対する考え方が変えられ、アーリン夫人が「善良な女」であることを証明する。

人間というものは、ふたつの別々な人間が、生物みたいに、善人と悪人とに分けられるものとは考えませんの。善人と呼ばれているひとでも、恐ろしいものを、捨てばちな気違いじみた気持ちとか、我意だとか、嫉妬だとか、罪だとかを持っていることもありますわ。悪女呼ばれをされているひとだって、悲しみや、後悔、あわれみ、犠牲の念を胸中にいだいているかもしれませんもの。そして、わたし、アーリン夫人を悪女だなどとは思いませんーそうでないことを知っております。(p.143)

さらにウィンダミア卿夫人はこのテーマを言換えて、次のように言っている。

わたしたちすべてにとって同じ世界があり、善と悪が、罪と無垢が、手に手をとって、その世界を歩みぬけるのですね… (p.203)

また、オーガスタス卿がアーリン夫人との婚約を発表した後、ウィンダミア卿夫人は「ああ！あなたはとっても善良な女性と結婚なさいますのね」と彼に話しかける。

ウィンダミア卿夫人の中にも、アーリン夫人の中にも善と悪、罪と無垢があり、「放蕩息子のたとえ話し」(ルカ15章11節～32節)の中に出てくる弟と兄を思わせる。弟は悪人のように見えるが、後悔して父のもとに帰り、父の憐れみと愛を受けて立ち返えることが出来たが、兄は善人のようでありながら、弟を許せないかたくなな心と嫉妬心の持ち主である。アーリン夫人は放蕩息子のようにであり、ウィンダミア卿夫人は兄を彷彿させ、また、アーリン夫人は「罪深い女」(ヨハネ8章1節～11節)をイメージさせるものがある。

ウィンダミア卿夫人とアーリン夫人の関係は、

実の母と子の関係であり、妻と夫の愛人としての敵対関係であり、善人と悪人との対照的な関係でもあると言えよう。

2. 二役を演じるアーリン夫人

熱烈で、注目に値する私的な関係の運命に基づく真面目な道徳的問題を扱ったこの劇の主人公達は、自分の過去の出来事や現在の成り行きによって、確かな破滅に運命づけられているように思われる。しかし、この劇は、新・旧約聖書の道徳からの回心を通して、ハッピーエンドでもなく、悲劇でもない、悲喜劇で終わるものである。

この劇に於いて、社会的因習は運命を左右する大きな力を持っている。しかし、世間の冷たさを単に暴露することに満足することなく、作者 Wilde は、人物達がキリスト教的なあわれみに挑戦したり、旧約聖書の報酬を拒絶することによって、世の冷たさに打ち勝たせている。また、この劇はファリザイ派的な道徳的偽善行為に対する非難と、キリスト教的な愛による回心において、非常に教訓的である。アーリン夫人は、書き残していったウィンダミア卿夫人の手紙を読み、娘を救うために彼女自身の犠牲を捧げる。オーガスタス卿の声を聞くやいなや、隣の部屋でアーリン夫人が突然発した「落としたのは私です」という叫びは、自己防衛の野性的な叫びではなく、母親であるという自覚から、娘をかばうための他利主義的なとっさの行動であった。しかし、娘を救いたいと思う反面、人間は本能的に自分自身にとって不利な状況が迫ると無意識のうちに自分の安全と利益を考えるものであるが、アーリン夫人のこの犠牲的な行為は、自分の娘に対する母親としての愛を優先させた結果であろう。彼女は現実をあやつるのに十分な強さを持った女性である。このことは彼女が世間の月並みな期待に添うことをはっきりと拒んでいることから分かる。アーリン夫人の出現を男性達は意味ありげな笑いと目をそらした顔つきで迎えている。この控えめな表現はヴィクトリア時代のステージにおける重要な

要素でもあり、Wildeは道徳的熟慮のために過剰な感情の表現を控えた。このことは教訓的劇作家としてのWildeにとって非常に大切なことである。

ウィンダミア卿夫人の誕生日の舞踏会にアーリン夫人を招待したいという夫の提案を拒絶する。そうした状況の中で、ダーリントン卿が彼女を、「夫のまなざしも、愛情の行為もすべて偽りである」と言って彼女を口説き、彼女の心をかき乱し、誘惑する。そして、ダーリントン卿の最後の嘆願の言葉が愛の不信の中をさまよい歩いているウィンダミア卿夫人の心にとどめをさす。

ダーリントン卿：…ロンドンじゅうの人間があなたの家出の理由を知るでしょう… 悪いって？なにが悪いのです？妻を捨てて恥知らずの女のもとに奔った男こそ悪いのだ。自分を辱める夫と同棲している妻こそ悪いのだ。かつてあなたは妥協しないといわれた。いまこそ妥協してはいけない。勇気を出して！しっかりして！（p.105）

このようなダーリントン卿の誘惑に唆され、ウィンダミア卿夫人はたった2、3時間のうちに母としての義務を拒み、愛の理想を受け入れ、自分が愛していない人のところへ行こうとしている。この行為は犠牲のための彼女の無力を示しているのであるが、彼女はこのことを人生の「 sacramentの浄化」であると考えている。しかし、道徳的な考え方にダーリントン卿と反対であるアーリン夫人は「愛してくれる男性に身をまかせる」か、「自宅で妻を辱めるような男（夫）を選ぶ」か、二者択一に迫られている哀れな娘の不安に答え、ダーリントン卿をオミットする理由を述べる。そして、その過程に於いてウィンダミア卿夫人の義務と忠誠の重要性を支持し、賞賛に値するアドバイスをもって締めくくっている。

アーリン夫人：神様があのお子さまを、奥さまに授けてくださいました。お子さまを立派に

育てあげ、その世話をなさる義務が神様にたいしてありますわ。もし、お子さまの生涯が奥さまゆえに台なしにでもなったら、どういって神様にお答えなさいます。お宅にお帰りなさいまし…ご主人は奥さまを愛していらっしやいます…でも、かりにご主人に千人もの恋人がいたとしても、奥さまはお子さまのそばにいらっしやなければならないいけませんわ。ご主人がつらく当たられても、奥さまはお子さまのそばにいらっしやなければならないいけませんわ。主人から虐待されても、奥さまはお子さまのそばにいななければならないいけませんわ。ご主人に捨てられても、奥さまのいらっしやるべきところは、お子さまのそばなのです。（p.126下線は筆者）

神と人との卓越した絆は、個人主義のダーリントン卿の理想より明らかに勝るものである。そして、この絆が必要としている義務の完成はおそろしい犠牲を要求するものである。「奥さまはお子さまのそばにいななければならない」と三回繰り返されるアーリン夫人のせりふには、御子イエスと聖母マリアの母子像を思い浮かばせるものがあり、母と子の強い関係が示されている。

子どもに対する母の愛は人間の虚栄や社会的尊重よりはるかに高いランクであることをアーリン夫人は自分のおろかな体験によって娘に愛情深く説く。いったん価値の段階がしっかりと確立されると、不徳義の結婚を主張する否定性は、神と子への積極的な義務の実行の前に薄れていく。神のみが見抜くことのできる魂は、真にその人自身となり、このアイデンティティーは世間に思われる自分より大切なことである。

要するに、「人生は sacrament（秘蹟）であり、その理想は愛である。その浄化は犠牲である」という、単に言葉にすぎなかったものが、アーリン夫人の行為を通して重要な意味をもたらした。ウィンダミア卿夫人に母親としての責務を訴えた後、彼女は自分の母性本能と神への忠誠に基づいて、娘に対する愛に答えて、娘であるウィンダミア卿夫人を「家に帰らせる」ことによって、彼女自身は自己完成への強い母性

本能という衝動を犠牲にする。ピューリタン（清教徒）であると自己公言するウィングミア卿夫人は部分的ではあるが、自分の経験から学び取ったことを通して、彼女自身を救うのである。彼女は旧約聖書の罪の宣言に対して、新約聖書の卓越を認める以前に、彼女は容赦なく他人に強要した自分の意見を受け入れなければならない。と同時に、人間は善も悪もひめた存在であるということアーリン夫人から学んだのである。

一方、アーリン夫人はウィングミア卿夫妻のもつれた関係を正すために、真実に妥協して解決しようと強いる。彼女は現実主義のやり方とは全く違った仕方で解決する。彼女は神と娘、そして自分をとりもどし、彼女の真実性を保証し、彼女自身の心の義務を成し遂げたのである。これらの義務の実行が保証する彼女のアイデンティティーは曲げられることはできない。むしろ彼女の純粋で大胆な行為と、偽善的ではなく、賢い説明によって、世間を屈服させた。しかし、彼女自身現実において非常に大きな苦勞を忍耐し、自分の誠実さを維持するために、軽い嘘をつき、意識的に彼らに誤った彼女自身のアイデンティティーを伝えようとした。アーリン夫人と神のみが本当の彼女の姿を知っている。

この劇において、Wildeは個人主義と自己犠牲に関して、特に複雑な論議を示している。アーリン夫人は不名誉から娘を救うために自分が再び社交界に入る計画を犠牲にする。しかし、この犠牲は自己完成の行為であり、個人の意義、価値を重視し、その自由と権利を尊重するきびしい個人主義の行為でもある。すなわち、アーリン夫人は自分の心のなかの声に従って行っているのである。神は彼女自身であることを要求している。そして最後にアーリン夫人は自分自身だけを犠牲にしているのである。

社会的しきたりは運命を左右する支配力をもって、劇や社交界劇に影響を与えていた。他方、Wildeは社会とそのしきたりをキリスト教的価値観を持って考え、神と人間に対するしっかりとした確信を供述している。

ところで第二幕の舞踏会の場面と同じように、型にはめられた文章、反復、リズム的な韻律が強い世俗的な儀式を作り出すために使用されている。この作品の中には、二つのリズム、すなわち軽さと重さの二つのリズムがある。オペラの性質を持ったこのリズムは感情を強く出すときに使われる。ウィングミア卿夫人が書いたダーリントン卿宛の手紙をアーリン夫人が発見する時、そのリズムと調子が彼女のクールなスタイルを即座に変える。「どうすればいいのだろう？ ついぞこれまで覚えなかったある感情が、心のなかで目覚めてくるような気がする。」また、アーリン夫人がウィングミア卿夫人に夫と子どものもとへ帰るようにと繰り返し訴える時、オペラ的な口調でできるだけ速く反復される。

「お子さまのそばにいらっしゃらなければならない」「お子さまのもとにお帰りあそばせ」という重い調子と容赦しない3回の繰り返しによって、母親としての子どもへの情熱的な本能を抑制した心が上手く表現されている。アーリン夫人がウィングミア卿夫人の子どもについて話す時、彼女は自分が捨てた子どもとしてウィングミア卿夫人のことを考えている。この時アーリン夫人は娘のために働き、彼女を救うよい機会であった。そして、あたかもウィングミア卿夫人は自分の母親にすぎていることが解っていたかのように、‘Take me home’ 一家につれて帰って—といいながら、子どものようにどうすることも出来ないで、両手を差し出した時、アーリン夫人は報酬を勝ち得て、その頂点に達した。

ところで、ここに使用されている3回の繰り返しはWildeの童話や劇の中でもしばしば見られる手法であるが、旧約聖書では神がサムエルに語りかける箇所（Iサムエル3章4節～14節）、また新約聖書ではペトロがイエスを否む場面（マタイ26章69節～75節）、イエスがゲッセマネで祈る場面（マタイ26章36節～44節）、「私を愛しているか」とイエスがペトロに確認する時などに用いられ、3回の繰り返しは聖書によく見られる表現である。

ウィングミア卿、オーガスタス卿、を含めた

友達の一団を引き連れてのダーリントンの帰宅は緊迫の場面である。夜遅く未婚の男性のアパートで、見つかるのではないかと自暴自棄になって、ウィンダミア卿夫人はカーテンの後ろに、アーリン夫人は観客から見えない部屋（寝室）に隠れ、二人は「善良な女」という妄想的なテーマに話題を変えた男性達の会話を立ち聞きする

しかし、ウィンダミア卿夫人が不注意で床に落とした扇で、男性達に見つかるであろうということから、男性達に気付かれずにこっそりと逃げ出す娘を救うために、アーリン夫人は急いで皆の前に意識的に姿を現したとき、男性達のアーリン夫人に対する反動はまさに冷たい追放のタブローであった。娘を説得した後、思いがけない「扇」のことで娘のこの不祥事が発覚しないようにとアーリン夫人は自分の名誉を捨てて男性達の前に現れた。立ち聞きした「善良な女性」であるとされたアーリン夫人の名誉挽回は一瞬のうちに消え去り、逆に軽蔑、驚愕、怒りの視線を浴びることになった。

無事にウィンダミア家に戻ったウィンダミア卿夫人には、アーリン夫人から説得され勝ち得た大人として成長した姿が見られる。アーリン夫人についての夫による未完成な説得がかえって誤りやすい狼狽した関係を生み出したのであるが、この体験を通して「人生の恐ろしさ」を知ることとなった。ウィンダミア卿夫人は彼女の自信がうち砕かれ、彼女の本当の強さを見せる。ウィンダミア卿がかつてかばっていた女性を軽蔑しはじめた時、彼女は逆にその女性アーリン夫人をかばう。彼がアーリン夫人は悪い女だ、またとない悪女だという時、「人間というもの、善人と悪人とに分けられるものとは考えられない」という彼女の成長した答えが返ってくる。

一方、アーリン夫人はせっかくの好機をすっかり台無しにしてしまった理由を次のように言っている。

この生涯でたった一度だけ、母親の気持ちというものを知ったの。ゆうべのことよ。恐ろしい気持ちだった。…あまりにも深く苦しめたわ。

20年というもの。おっしゃるとおり、あたしは子どもなしで暮らして来た—いつまでも子どもなしで暮らしたいのよ。(p.191)

Wildeの手紙によると、この劇の起源は思いも寄らない母親の愛情の発見、自分の子どものために自分の関心事の犠牲、そしてこの情熱はあまりにも恐ろしくあまりにも私を苦しめる…もうこれ以上母親にはなりたくないという感情を持った女性の心理的アイディアであった。

母親と娘の出会い、はじめウィンダミア家での舞踏会、次にダーリントン卿の部屋、そして第3番目の出会いはウィンダミア家での感動的な場面である。アーリン夫人は、自分に対して厳格な抑制を保っている。彼女の自己犠牲に対する娘の感謝を受け入れるという苦痛を伴った喜びを味わう。そして、娘とのはじめての愛情のこもった会話は、アーリン夫人に今まで彼女を夢中にさせていた社交界での成功とか失敗という見地からではなく、心の深い個人的関係の問題としての真面目さを十分に解らせた。恐ろしいほどの現実化の重みには、ダーリントン卿の部屋で本当に起こったことについて言わないようにとウィンダミア卿夫人へのアーリン夫人の哀願に付け加えられた痛烈さがある。

わたしが生涯でおこなった、たったひとつの善いことを、ひとに話したりして台なしになさらないで。ゆうべのことは、わたしたちのあいだの秘密にしておく約束してくださいまし。(p.199)

Wildeは、アーリン夫人が二役を演じるための急場を構成している。アーリン夫人は仮定されたウィンダミア卿の妖婦であり、母親を演ずるのに野心のない世の墮落した女である悪人役。一方、彼女は自分を信用している娘に対して誠実な母親役と、娘の運命的な手紙を発見して泣く母親を演じなければならない善人役である。妖婦と母親、善人と悪人の二役は、イエスに会って回心した徴税人ザアカイ（ルカ19章1節～10節）を想起させるものがある。

アーリン夫人はウィングミア卿の妖婦を演じながら、娘に自分の二の舞を踏ませたくないと思う母親としての感情が芽ばえ、母親役を演じるスピーチの道徳的価値にたいして、彼女は最後に自分の他のものを捨てることになる。そうすることによって、彼女のこのスピーチは個人的な告白ではなく、説得のための便宜的な手段となる。ウィングミア卿夫人の家出の秘密はアーリン夫人との間で守られ、夫ウィングミア卿にはあかさされることなく、ウィングミア卿夫人はアーリン夫人の忠告を受け入れ、彼女のピューリタンの道徳の厳格さが緩和された。他方、ウィングミア卿はアーリン夫人の本当の姿を妻に隠し続ける。アーリン夫人が両方の秘密を守ることによって人間関係を良好にしている。

3. 「扇」—心理的描写

Wilde の劇の卓越した技巧は実生活の題材の様式化がきわめて重要な要因となっているということである。また、場面と舞台装置の様式化では、部屋をカーテンで仕切るとかテラスは結婚申し込みや浮気の間、不吉な場所として用いられている。他の重要な目に見える効果は、衣装、背景、登場人物たちの暗示的な取り合わせによって与えられている。最も注意すべきことのひとつがダーリントン卿の部屋でアーリン夫人が発見される時の場面で起こる。

ステージの一方に「扇」の発見でショックと嫌悪の状態にあるイブニングを着た男達と、ステージの反対側にある部屋から現れた一人の女性、アーリン夫人との間に注目を引くように入念なコントラストが工夫されている。Wilde は男性がイブニング姿の黒と白が単調でむしろ意気消沈させると考え、どんなわずかな変化も許さないことを暗示するために、男性の衣服の単調さを巧みに利用している。モーニングと堅いシャツの黒と白のがっしりとした広がり、肌をたくさん出して着ているイブニングドレス姿で、傷つきやすく見える婦人のひ弱さと強く対照している。このシンボリックな取り合わせは婦人達に対する社会的尺度の不公平さを示す無

言の証言でもある。

ところで、特に目に見える大切なものの中で一番重要なものは「扇」である。Wilde の「扇」のシステムティックな使い方は、家庭内の悲劇を避けるために、予期しない軽快な手法と調和している。扇はいわゆる風俗喜劇の旗印であり、シンボルである。この作品において扇は手から手に、部屋から部屋へと渡るとき、それは所有者の社会的成熟におけるある発展を特徴づけている。扇の出来事は夫婦間の背信におけるしっぺ返してあり、離婚した母親と同じ運命の危険からその娘を救うためのものであった。

はじめその扇はウィングミア卿の妻への誕生日の贈り物として現れる。夫から誕生日に贈られたバラの花と名前の記してある扇は婦人にとって非常に大切なものとして扱われ、夫婦の愛が示されている。すなわちこの扇は夫の妻に対する「愛のしるし」である。また、それは、もし彼女の夫がかれの妾となっているという噂の女性を舞踏会に招くと言ひ張るなら、その時ウィングミア卿夫人はアーリン夫人を侮辱し、「あの女がこの家の敷居をまたいだなら、この扇で顔を打ってやります」と息巻き、彼女の顔を打つ「憎悪の武器」ともなる。愛情のしるしであった扇は、夫に対する憎しみとアーリン夫人に対する侮辱の心理を表現するための「打つ」道具として変わる。

舞踏会の場面において、ウィングミア卿夫人は夫を悩ませながら、ダーリントン卿にその扇を持っていてくれるようにと手渡し、これみよがしに預ける。手渡すと言う行為によって、この時この扇はウィングミア卿夫人とダーリントン卿が「フレンド」、すなわち愛人になるための必要性を示す「物質的なしるし」、「今夜」夫の身代わりとなるための必要性を示す物質的な目に見えるしるしとなる。ウィングミア卿の前で、ダーリントン卿とウィングミア卿夫人の間を扇が行き交う。扇は18世紀以来、単なる装身具ではなく、恋愛感情を示す道具として用いられていたように、彼女の心が揺れ動き、ダーリントン卿に扇を持たせた後に返して貰うとき、ウィングミア卿夫人が「調法じゃないこと、扇っ

て？…今夜お友達がほしい」とダーリントン卿を誘う。このように扇はそれを使う女性の感情を間接的に伝えている。

しかし、クライマックスが訪れたこの時、ウィングミア卿夫人はアーリン夫人をこの扇で打つてやりたいという、激しい憎しみと怒りの感情が削がれ、アーリン夫人の落ち着いた美しくにこやかな振る舞いに圧倒され、打つ道具として握りしめていた扇を手から無意識のうちにすべり落としてしまった。ウィングミア卿夫人が彼女に直面する時を、皆気をもみながら待っていた。もし、彼女が脅しを実行するのであれば、短刀で突き刺すような酷評に匹敵する暴力行為となるであろうが、彼女はこれを実行することは出来なかった。なぜウィングミア卿夫人はアーリン夫人を打つことが出来ず、扇を床に落としたのであろうか。アーリン夫人のどんなことにも動じない態度にウィングミア卿夫人は心理的に負けを感じたのであろうか。彼女は床に落とした扇を拾おうともせず呆然と立っていた。ダーリントン卿がそれを拾い、彼女に手渡す。扇が手から「落ちる」、それを「拾う」、「渡す」という、この扇の移動はウィングミア卿夫人の心理的な心の動揺を表現している。

次にその扇はダーリントン卿の部屋に現れるが、ウィングミア卿にとってその扇は「裏切りのしるし」となる。しかし、ダーリントン卿との関係を求めて来たウィングミア卿夫人であったが、彼女の手から離れた扇は彼女の心が彼から離れたことを意味している。

一方、おしゃべりな男性達は、その置き忘れた扇を発見し、未婚の男性の部屋という状況の中で、この小さな白い道具、扇はもはや無害のものであるが、禁じられた私通を意味するものであったため男性達を興奮させ、さらにウィングミア卿が妻と同じ扇であることに気づき、暗く陰悪な雰囲気が変わった。ダーリントン卿の部屋で発見されたその扇の釈明のために、アーリン夫人は自ら男性たちの前に出ていき、扇を拾い、その扇が自分のものではなく、間違っただけでウィングミア卿夫人のものを持ってきてしまったと虚偽の申し立てを行う。ここで扇は母親の

娘に対する偉大な愛の行為、我が身、我が名誉を捨ててまでも娘をかばう母親の心理が表現されている。

アーリン夫人が進み出て扇の責任を負うとき、最後まで高潔さの重要性を与えているのはこの判断力である。次の日、その扇はその所有者であるウィングミア卿夫人のところへ戻ってくる。扇がアーリン夫人からのメッセージを添えて盆の上にのせて持って来られたとき、それはちょうどサロメのところへ銀の皿のうえにのせて運ばれた首の贈呈と同じくらいの意味を詰め込んだ扇となった。その扇はウィングミア卿にとって、そうした類の恐ろしい意味を持っていた。

この時まで、この扇は明らかにシンボリックな意味をおびている。すなわち、扇は社会の有能な大人の付属物であり、武器である。しかし、アーリン夫人の娘への扇の返還は、その所有者であるウィングミア卿夫人と贈り主である夫とを再び結びつけるだけでなく、アーリン夫人が社交界での苦しい体験を再び耐えること、すなわちアーリン夫人はその扇の発覚のために自分自身を放棄することと、社会的な不名誉を被ることを意味している。

人を感動させる母親と娘の間の最後の場面において、言葉には表されることなく、無理矢理に心配させられた微妙な感情が、彼女たちの共有している名前の書かれた「すばらしい扇」の娘から母親への贈り物の中に象徴されている。ウィングミア卿夫人はアーリン夫人が彼女の本当の母親であることを決して知らないであろう。しかしウィングミア卿夫人はたぶん無意識のうちに、一方アーリン夫人は非常に意識的にその扇の譲渡は、彼女たちのほんとうの関係の特色ある女性的な親交を現している。

不名誉を被ったアーリン夫人の手からウィングミア卿夫人のもとに戻された扇は、再び人手に渡り、事実上母親であるアーリン夫人の手元に娘の形見として留まることになる。そして扇は最終的にアーリン夫人に与えられた娘の形見として、また親子の愛の絆としてのシンボルとなった。

結 び

ウィングミア卿夫人の頑迷なピューリタンの道徳律の遵守はこの劇が構成されている中心的な論争である。

Wildeはここで人間を避難することと、その行為を避難することの区別をほのめかしている。ウィングミア卿夫人はキリスト教的なあわれみの必要性を認めるために、彼女の初期のピューリタンの厳しい懲罪の考え方を乗り越え、成長の姿を見せた。

「人間というものは、ふたつの別々な人種か生物みたいに、善人と悪人とに分けられるものではない」という論争がこのドラマの中心であるが、劇的行為はアーリン夫人が彼女の娘を道徳の亀裂から救うことによって決まる。このように、Lady Windermere's Fanは多くのメッセージをもった劇である。

その本来のタイトルは「A Good Woman」であった。ウィングミア卿夫人は「善良な女」のように見える。しかし、身分の良いという狭い意味においてのみ良いのである。

他方、アーリン夫人はウィングミア卿夫人に、「血も涙もない女、顔を合わせることでさえ汚らわしい、知り合うさえ墮落であるような女、下等な女、夫婦のなかへ割り込んでくるような、そんな女」と言われているように良くない女として見られている。

しかし、アーリン夫人の軽率な言動がなんであれ、彼女はこの劇のオリジナル・タイトルの中でのほめかされているように、根本的に「善良な女」である。自分自身の評価を犠牲にして自分の娘を守るとき、アーリン夫人は、彼女が感じた痛ましい母性愛によって清められ、純化され、彼女は寛大、愛、自己犠牲が出来ることを示している。そしてウィングミア卿夫人はアー

リン夫人が自分に対して及ぶ限りの尽力を知った時、彼女はこの劇の基本的なメッセージ、キリストの教える「無私の愛」を学んだのである。

引用文献

- 1) ウィングミア卿夫人の扇：ワイルド. 西村孝次訳, 新潮社, 平成17年

参考文献

- 1) The COMPLETE WORKS OF OSCAR WILDE: J.B.Foreman (ed.), Collins, London and Glasgow, 1983.
- 2) Oscar Wilde: Art and Egotism, Rodney Shewan, Macmillan Press, 1977.
- 3) Oscar Wilde: the Critical Heritage, Karl Beckson (ed.), London, Routledge and Kegan Paul, 1970.
- 4) A Selection of Critical Essays: Wilde; Comedies, William Tydeman (ed), Macmillan Press, 1982.
- 5) Oscar Wilde: Donald.H.Ericksen, TEAS 211, TWAYNE, 1977.
- 6) Oscar Wilde: Robert Keith Miller, Frederick Ungar Publishing CO. New York, 1982.
- 7) The Moral Vision of Oscar Wilde: Philip K. Cohen, Fairleigh Dickinson University Press, 1878.
- 8) OSCAR WILDE: Katharine Worth, Macmillan Modern Dramatists, Macmillan Press LTD, 1983.
- 9) The Play of Oscar Wilde: Alan Bird, Vision Press, 1977.

(2004年4月4日受稿)